

---

# 一つ一つの力

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一つ一つの力

### 【Nコード】

N8388I

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

麻紀は心優しい少女だった。それで野良猫や野良犬達を拾っては世話をしていた。けれどそれができたのは彼女だけの力ではなくて。皆が力を合わせればというお話です。

## 第一章

一つ一つの力

坂村麻紀は資産のある家で優しい両親に囲まれ何一つ不自由なく育った。その為彼女もかなり優しい性格になった。天真爛漫で誰にも優しい女の子であった。

恵まれた環境で何一つ不自由なく育てられると我儘になるか優しくなるかのどちらかだが彼女は幸いにして後者であった。だから彼女は誰からも好かれた。

「いい娘に育ったね」

「そうですね」

彼女の両親もこのことを心から喜んでいた。そんな麻紀は好きなものがあつた。

まずはぬいぐるみだつた。彼女の可愛らしい如何にも女の子といった部屋の中はぬいぐるみで一杯だつた。それは中学校に入った今でも変わらない。

「あの、お嬢様」

彼女専属の執事である。田所美幸はいつもそのぬいぐるみの部屋を見て困っていた。黒い髪を後ろで上に束ねお団子にしている細面の彼女は小柄で童顔、しかも丸い顔をしていて茶色の髪をロングヘアにしている彼女とは正反対であつた。麻紀は小柄で体型も幼い。小学生にも見える。それに対して美幸は背も高くプロポーシヨンもいい。いつも彼女が通っている有名なお嬢様学校の制服のほかは白やピンクのやたらとフリルのついたドレスの彼女とは違い渋い色のスーツを着ている。下はいつもズボンである。これもまた実に対象的であつた。

「またぬいぐみが増えていますよ」

「だってどれも可愛いから」

こう言うのである。

「だから一つも捨てられないじゃない」

「どれもですか」

「うん、どれもよ」

その邪気のない笑顔での言葉であった。

「捨てられないわよ。皆私のぬいぐるみだし」

「ですが一つ位捨てられては」

いい加減部屋がぬいぐるみだらけだからだ。壁もベッドの上も本  
当にぬいぐるみだらけである。美幸が言うことも無理はなかった。

「如何でしょうか」

「駄目よ、御父様と御母様も仰ってたわ」

しかし彼女は少し怒ったようになっていつもこう言うのだった。

「ものは大事にしなさいって。そうでしょう？美幸さん」

「それはそうですが」

「だから。どれも捨てちゃ駄目なの」

こう返すのが常であった。

「絶対にね」

「やれやれですね」

ここで折れるのがいつもの美幸であった。仕方ないですね、とい  
った顔になって結局は負けるのである。そしてある日のことだった。  
学校の授業が終わって迎えに来た美幸と一緒に車で家に帰っている  
とだった。不意に道にあるものを見つけたのである。

それを見た麻紀はすぐに。美幸にこう言った。

「美幸さん、車を停めて」

「車をですか」

「ええ、停めて」

「こう言うのである。」

「すぐに」

「一体どうされたのですか？」

「あそこ見て、あそこ」

後ろの席からの言葉である。車は家の運転手が動かしている。後

部座席に美幸が右手、麻紀が左手に座っている。麻紀は左手を指差して美幸に告げてきたのだ。

「あそこに猫がいるから」

「猫もいるでしょう」

それに対する美幸の返答はクールなものだった。

「それが一体」

「首輪がないから野良猫よ」

彼女は言った。

「だから停めて。あのままだと可哀想よ」

「あの、お嬢様」

美幸は少し困った顔になって麻紀に告げた。

「野良猫なぞ幾らでもいますし」

「車停めて」

しかし麻紀はまだ言うのだった。

「町田さん」

「はい」

運転手の名前だ。赤い髪を短く切った若い女の人だ。女性の運転手なのである。

「車停めて」

「わかりました、お嬢様」

「ちよつと町田君」

美幸もまた彼女に声をかけた。自分より年下なので君付けである。呼び捨てにするのは好まないしちゃん付けは麻紀の手前宜しくない。それでいつも君付けにしているのである。

「そんなことしても」

「お嬢様の御言葉には逆らえませんが」

忠義一徹の彼女であった。

「ですから」

「仕方ないわね」

「ちよつと待ってて」

車を停めるとすぐに外に出る麻紀だった。仕方なく護衛の為に美幸も出る。彼女はただの執事ではなく麻紀のボディガードも兼ねているのである。ついでに言えば麻紀が成長したならば秘書になることもあらかじめ決められている。文武両道の人物であるのだ。

## 第二章

その麻紀について行くとその白いあちこち薄汚れた猫の前にしゃがみ込んでいた。そしてすぐにその猫を抱きかかえたのであった。

それを見て美幸は。困り果てた顔で彼女に言うのであった。

「制服が汚れてしまいます」

「汚れたっていいわ」

しかし彼女はにこりと笑って美幸に言葉を返した。

「別に」

「いいと言われましても」

「だって服が汚れても洗えばいいだけでしょ？」

その猫を抱きかかえての言葉である。見れば大きく特に可愛くもない。しかし彼女はその猫の可愛さやそういつたものを見ているのではないのであった。

「それだけで済むでしょう？けれどもこの猫の命は」

「それでは」

「私が育てるからいいでしょう？」

そして今こう言ったのである。

「御飯だって私が買うし」

「それでは本当に」

「この猫はどう見ても困ってるから。だから」

言葉を続ける麻紀であった。

「お家にね。連れて行くわ」

「そうですね。わかりました」

ここで遂に美幸も折れたのであった。少し溜息を吐き出したがそれでも頷いたのであった。

「いいでしょう。旦那様と奥様には私からお話しておきます」

「有り難う、美幸さん」

麻紀は笑顔で彼女に言った。そうしてそのうえでその猫を自分の

家に連れて行った。すぐにその身体を洗いそれから乾かして。御飯もあげるのだった。

「途中にペットショップがあつて何よりでした」

「洗えだし御飯も買えだし」

その女の子そのものの広い部屋の中であの猫を見ながら美幸に言う麻紀だった。洗われた猫は今はその麻紀が差し出した綺麗な容器の中の御飯と水を一心不乱に食べ飲んでいる。どうやらこれまでかなりお腹が空いていたらしい。見れば身体はかなり痩せている。

「これでいいわね」

「そして旦那様と奥様に携帯で連絡したのですが」

「何て仰つてるの？」

「いいそうです」

こう麻紀に述べたのであった。

「その猫を家で飼つても」

「そう。よかった」

その言葉を聞いて満面の笑みになる麻紀だった。

「御父様も御母様もわかつて下さったのね」

「はい。ではその猫は」

「私が責任を持つてね」

育てると言うのだった。ここでも。

「そうさせてもらうわ」

「そうですか」

「お小遣いはいつもたつぷり貰つてるし」

お金には不自由していないのであった。

「だからね」

「それではその猫の名前は」

「白いからホワイトにするわ」

言いながらそつとその首に首輪もかけるのであった。だがまだそこに名札は付けられてはいなかった。そうした意味でこの猫にはまだ名前がなかった。



「それでどうかしら」

「いいと思います」

名前については特に何も言わない美幸だった。

「それでは。そのように」

「これから色々買わないといけないわね」

麻紀は優しい目でまた言うのだった。

「ホワイトが寂しかったり退屈しないように」

「はあ。そうですね」

「猫の為の遊び道具とかベッドとか」

ペットシヨップでちらりとみたそうしたものを思い出している言葉である。

「そうしたのもね。買ってね」

「お嬢様が全部お一人ですか」

「だって私が飼うって決めたから」

その決意はあくまで忘れないのであった。

「絶対にそうするわ」

「わかりました。それでは」

美幸は彼女のその言葉を受けて頷いたのであった。

「お嬢様が思われるままに」

「ええ」

こうして彼女はそのホワイトと名付けた猫を飼いはじめた。しかしそれはそのホワイトだけに留まらず次から次に猫を拾ってきたのであった。何時しか屋敷の中は猫だらけになってしまったのだった。

「美幸さん、これはまた大変ですね」

屋敷の中に仕事で入って来た町田は苦笑いを浮かべて美幸に告げてきた。灰色の運転手の制服とズボンが彼女のそのプロポーションによく似合っている。

### 第三章

「今お屋敷の中の猫は何匹ですか？」

見ただけでももう五匹はいる。白いのもしれば黒いのもいる。三毛猫もいれば寅猫もいる。種類も様々な猫がいるようだった。

「一体」

「二十匹はいると思うわ」

美幸は少し困った顔で述べたのだった。

「多分だけれど」

「多分ですか」

「お嬢様が拾って来るだけじゃなくて何処から聞いたのか自然に猫が屋敷の前に来たり猫を預けに来たりする人も出て来たりしているのよ」

「そうした人達もですか」

「ええ、そうなのよ」

その少し困った顔での言葉であった。

「だからこれからもどんどん増えるわ」

「そうですか。参りましたね」

「しかも猫だけじゃなくて」

それだけではないというのであった。

「犬もね。困っている犬がいたら拾ってきだして」

「今度は犬もですか」

「今外に三匹いるわ」

「何時の間に三匹も」

「貴女が運転の順番でない時にね。拾ったのよ」

そのことも今話すのだった。

「それでまた増えて」

「それですか」

「お嬢様はその全部の面倒を見ておられるわ」

「その二十匹の猫と三匹の犬もですか」

「ええ、そうよ」

「そうだと語るのだった。」

「お嬢様お一人でね」

「凄いですね、それはまた」

町田は話を聞いて呆れたがそれ以上に感嘆していた。

「お嬢様は口だけの方ではないことはわかっていましたが」

「何もかも御一人でやっておられるわ」

「また話す美幸だった。」

「犬達の散歩もね」

「御立派ですね」

「素直な賞賛の言葉だった。」

「まことに」

「ええ。これからもどんどん犬や猫が増えていくでしょうけれど」

「はい」

「多分お嬢様は全ての面倒を見続けられるわ」

「こう話すのだった。」

「きつとね」

「それじゃあ私達は」

「どうしたものかしら」

「だがここで美幸の言葉は少し鈍いものになってしまった。」

「こうしたことってはじめでだから」

「私もです」

「お金はね」

「お金のことはわかるので話すことができた美幸だった。」

「奥様が内密にお嬢様の口座にお金を振り込んで下さっているわ」

「その犬や猫達の御飯やそういつたものの為ですね」

「そうよ。だからお金は大丈夫なの」

言いながら周りにいる猫達を見た。螺旋階段の終わりのその端で赤絨毯の上で丸くなっている猫もいれば適当に歩き回っている猫も

いるどれも実にマイペースである。

「お嬢様はお世話に専念しておられるわ」

「その専念がかなりのものですが」

「それを見せてもらっているだけだけれど」

今野美幸はまさにそれだけである。そう自分自身で言っているのである。

「お嬢様は元々一途な方だったわ」

「はい」

「それで純真でね。いい意味でね」

このことは既によくわかつている彼等だった。わかっているからこそ言えることだった。

「それでも。あそこまでとはね」

「思いませんでしたか」

「そうよ。お嬢様にはそれこそ生まれられて赤ちゃんだった時からお世話をさせてもらっているけれど」

「それでもなのですね」

「ええ、そうよ」

こっつ答えるのだった。

## 第四章

「あの方はね」

「何かまた猫か犬を拾われると思いますが」

「それはもうわかってるわ」

既に読んでいるというのである。これはもう容易に想像がつくとであった。

「もうね」

「ではどうされますか」

「答えは出ているわよ。いいわ」

いいというのだった。

「もうね。それでいいわ」

「ではお嬢様にこのまま」

「けれど。まさかと思うけれど」

ここで不意にといった感じで表情を暗くさせもした美幸であった。そのうえで町田に対してさらに話すのだった。その怪訝な顔で。

「お嬢様はこの世の全部の野良猫や野良犬を育てたいって仰るのかしら」

「まさか」

「本当にまさかとは思っわ」

自分ではそれは断る美幸だった。

「けれど。あそこまで熱心だと」

「熱心ですか」

「そうよ。熱心なのよ」

「こつ話すのである。」

「どつなるのかしら」

「その時は何としてもお止めするわ」

今度は強い決意の顔になった。その顔も見せるのだった。

「絶対にね」

「わかりました。ではその時は私も」

「ええ。それじゃあ頼むわ」

言いながらであった。二人は今も屋敷の周りの猫達を見ていた。この前と比べても増えている。その数を見てそうしながら話をしていくのだった。

それから猫も犬も増え続け猫は三十を越え犬は十匹に達しようとしていた。危惧を深めた美幸はある日町田を連れて家の大きな応接間で猫達に餌をやっている麻紀に声をかけた。彼女は赤絨毯の上にしやがみ込んでそのうえで皿を一つ一つ出して猫達に餌をやっている。その彼女に対して声をかけたのだ。

「あの、お嬢様」

「宜しいでしょうか」

二人で主に声をかけた。

「少しお話したいことがあります」

「いいでしょうか」

「どうしたの？美幸さんだけじゃなくて町田さんまで」

麻紀は少しきよとんとなったような顔で二人を見上げて言った。

「何かあったの？お話って」

「この猫や犬達のことです」

「それです」

彼等はそれぞれ話すのだった。

「あの、まさかと思うのですが」

「まさか？」

「はい、この世の猫や犬達は全て」

「そうしたいわ」

麻紀はここで美幸が最も恐れていたことを言った。そう思われた。

「できるならね」

「できるならですか」

「ええ。できるなら」

しかしすぐに美幸が安心することを言うのだった。彼女はそれを

聞いて内心ほつとしたできるなら、というのは明らかかな否定の言葉だったからだ。

「できるならね」

「それではどうされるのですか？」

「そうです。一体」

「私ができる限りそうした猫や犬達を育てるわ」

こう言うのであった。

「猫や犬達を」

「そうですか。できる限りですか」

「私は神様じゃないわ」

それはよくわかっていようだった。麻紀にしても。

「人間よ。人ができることなんてちっばけなことじゃない」

「はい、それは」

「確かに」

それは美幸も町田もわかっていた。むしろまだ幼いと言ってもいい麻紀が気付いている方が彼女達にとっては驚くべきことであったのである。

## 第五章

内心驚きながらだった。しかしその驚きを隠して二人は。さらに彼女に対して問うたのであった。

「じゃあ一体」

「どうされるのですか」

「私ができるだけ。助けられる猫や犬達を助けたいわ」

「できるだけですか」

「ええ。その人間の私ができるだけよ」

彼女はこう言うのである。全く変わっていない。しかしそれでもだった。彼女は。

「できるだけしかできないけれど」

「助けられる猫や犬達と助けられない猫や犬達がいますか」

「できるなら本当に全部助けられたらいいわ」

また言う麻紀だった。

「できるならね」

「できるならですか」

「私はこうして私ができるだけのことをするわ」

今も猫達に餌をやっている。猫達は今の麻紀達の言葉をよそにただ餌を食べているだけである。しかし彼女を慕うようにして周りにいた。

「それじゃあ」

「はい。それじゃあ」

「これからもですね」

「ええ。これからも猫や犬達を育てていくわ」

今度は水を入れた容器を出していた。それも人数分ある。

「こうしてね」

「わかりました。それでは」

「お嬢様はそうされて下さい」



美幸だけでなく町田も彼女に言った。

「是非共」

「私達も及ばずながら」

「こんなこと言ったら笑うかしら」

くすりとしながらの今度の麻紀の言葉だった。

「一人一人の力は小さくても」

「小さくても？」

「皆が力を合わせればね」

こう話すのであった。今度は。

「きつとよくなるわ」

「そうですね。皆ですか」

「皆が力を合わせればですね」

「そう思うの。けれど私は一人でもするわ」

その決意は変わらないのだった。

「きつとね」

「町田君、じゃあ私達も」

「そうですね」

ここまで麻紀の話を聞いて確かな顔になって頷き合う二人だった。そのうえで言葉を交えさせる。そのうえで今決意をしていたのである。

「私達のできる限りのことをしましよ」

「お嬢様と共に」

二人も微笑んで麻紀に言うのだった。これがはじまりだった。

坂村麻紀は動物愛護、ひいては孤児の保護に尽力した本当の意味での活動家、女性達のリーダーとして知られることになった。実家のバックアップはあり続けたが彼女は自分の為には金を使うことなくあくまで動物や孤児達の為にそれ等を使い続けた。彼女はよくこう言った。

「一人の力は限られています」

こう言ったのである。

「ですが多くの人が力を合わせれば。それは神様に匹敵する力になります」

幼さの残るその日の自分の言葉をそのまま実践し続けていたのであった。彼女はそのままに生きた。そしてその彼女の側にはずっと美幸と町田がいた。彼女達もまた麻紀の力になっていた。

確かに一人の力は弱かった。幼い日の麻紀も母の援助が無ければ猫や犬達を育てきれなかった。しかし力添えがあったからこそできた。そしてそれだけではなかった。麻紀のその心に打たれ二人や母だけでなく以後も多くの人が彼女の力となりそれはまさに神に匹敵するものになったのだ。心もまたそこにはあったのである。だからこそ力になったのだ。何かを救う大きな力に。

一つ一つの力 完

2009・9・14

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8388i/>

---

一つ一つの力

2010年10月8日15時26分発行